歴史よもやま話　その 19

壮絶、殉教の女・細川ガラシャ

本能寺の変で織田信長を殺した**明智光秀の娘**である。夫は戦国武将の**細川忠興**、利休七哲に数えられた茶人（細川三齊）でもある。玉子（ガラシャ）が忠興に嫁いだ背景については、忠興の父・細川藤孝（幽斎）と明智光秀は、織田信長が上洛して足利義昭を第 15 代将軍に就任させる前、義昭の側近だった二人を信長が織田家家臣とした経緯がある。玉子と忠興は信長の仲人で結婚した。

山崎の合戦で明智光秀は敗れ、逃亡中死亡する。主殺し・反逆者の娘は離縁され実家に戻されるのが当時の習いだが、夫・忠興はそうせず、玉子を丹後国味土野に幽閉する。

幽閉中、小侍従（嫁入りの時付けられた）や細川家親戚になる清野マリアなどが彼女を支えたという。

2 年後、豊臣秀吉の取りなしもあって、大坂細川屋敷に戻され監視下におかれた。

夫・忠興が秀吉の九州征伐に従って出陣中、玉子は清野マリアに導かれイエズス会の教会に行き、洗礼を受ける。九州から帰陣した忠興は、これを知って激怒、棄教させようとしたが頑として聞き入れず、やむなく黙認する。

彼女がキリスト教に帰依した理由は定かでないが、永井路子著「歴史をさわせた女たち日本編」のなかで、夫の保身の為に幽閉され、世間からは逆臣の娘として扱われ、夫不信・世間不信のなか、「人間は罪深い存在であるが、キリストの十字架によって贖なわれる」という教えに心を救われた　としている。

そして、関ヶ原合戦の前に**玉子は壮絶な死を遂げる。**

豊臣秀吉が死去したのち、加藤清正ら武闘派と石田三成ら文治派の対立が激化するなか、徳川家康は上野国で有名な小山会議を開いた。上洛命令に従わない上杉景勝を追討するという大義名分であったが、家康の真の狙いは、自らに味方する武将を一堂に集めその意志と団結を確かめることであったと言われる。さらに、石田三成を筆頭とする西方の武将方に反徳川の狼煙を上げさせる策謀であったという説もある。

この小山会議に細川忠興も参陣しており、出征する前、留守を預ける家老・小笠原秀清に、「もし玉子が石田方に人質にとられることがあれば殺せ」と命じていたとの説があるが定かでない。

西方の武将を糾合して挙兵した石田三成方は、大坂にある東方武将の留守屋敷を襲撃し妻子を人質に捕ろうとした。細川屋敷も襲撃されたとき、自殺を禁じるキリスト教の教えに従う玉子は、家老・小笠原秀清に自らの斬殺を求め、秀清はその亡骸を残さないよう屋敷を爆破した。

「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」

これは細川藤孝・忠興ら 4 代の家史・「細川家記」に残された玉子の辞世の歌とされる。

なお、「ガラシャ」は玉子の洗礼名で、明治期になってそう呼ばれたという説がある。